

一人ひとりの想いつたえたい >>> あなたの声でつくる情報誌

NO.51

2003・夏号

# まなこ

企画・発行

武蔵野市企画政策室市民活動センター男女共同参画担当



特集「かく（書く・描く）」

## ● 女が書くとき、男が書くとき ●

寄稿

- 「書かれて、書いて — 物書きの家に嫁いで」 藤原美子さん
- 「読み手が分かるように、気持ちが伝わるように」 名須川 浩さん

レポーター  
通信

- 明日公園で一緒に遊ばせない？ まなこレポーター 菊谷美恵子さん
- ネット裏の文章トレーニング まなこレポーター 古橋 哲さん

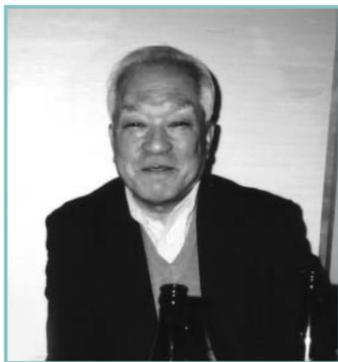
取材

知っていますか？「ノートテイク」 ● ボランティアセンター武蔵野

まなこ  
昔がたり

「女は絵なんか描いたら……」 語り ● 島津好江さん

## 読み手が分かるように、気持ちが伝わるように



名須川 浩

●1933年生まれ、西久保在住。石油会社勤務。その間、大阪、富山、ニューヨークにも居住。

四十二年間の会社勤務を終えて数年になる。年齢のせいも過ぎ去った日々を振り返ってみる気持ちになってくる。たまたま、市の自分史を書く講座に参加して、過去の自分の記録を年表にしてみることを教えられた。自分史を完成するまではいかなくても、部分的に何か書き残したいと思う気持ちになっていた。

「ライター入門講座」が市報に載ったのはその頃である。いくつかのテーマでエッセイ風のものを書かされ、書くことへの呼び水のようになっていた。引き続き、講師の西村良平先生の指導で、毎月書く機会を与えられ添削と批評を受けることになった。

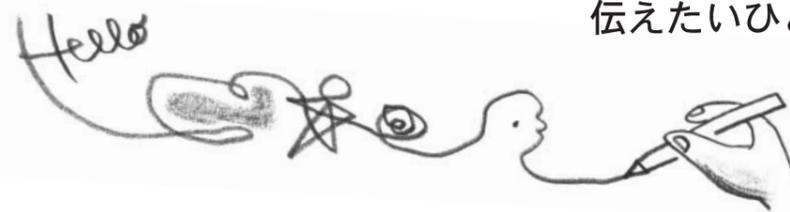
考えてみると、長い会社勤めの間は仕事上の文章を除いて「書く」機会はあまりなく、ましてエッセイのようなものを書いた記憶は殆どない。筆を取っても「何を書くか」よりも「いかに書くか」ばかり意識していたように思う。

実は、三年前から私より年長の舞台俳優の先生について朗読を学んでいる。詩や小説を声に出して読むと、文章の句読点も無造作に打つてあるのではないことがよく分かる。古典的な名作ほどそうだ。これは私にとって大きな発見だった。読み手が分かるように、気持ちが伝わるように書くことが大切なのだ。書いたものを声に出して読み、家族に聴いてもらうこともまた楽しいのではない。



## 「女が書くとき、男が書くとき」

書くことは、想いを伝えること。  
伝えたいことはありますか？  
伝えたいひとはいますか？



### 書かれて、書いて — 物書きの家に嫁いで

藤原 美子



●1955年生まれ、吉祥寺北町在住。数学者でエッセイストの藤原正彦氏の妻。著書に「子育てより面白いことが他にあるだろうか—三人の息子と私」(海竜社)。訳書に「男の更年期」(新潮社)「ケンブリッジ・クインテット」(新潮社)など。

ある時、夫の書いたエッセイを雑誌に見つけた義父、新田次郎は、夫を呼びつけた。その内容がまずい、と言うのである。

そのエッセイは、私達が新婚の頃、乗鞍の白骨温泉に泊まった時の話である。折からの雨で外に出られずオセロゲームをするようになった。ルールを知らない夫に私は指南役をつとめることとなった。最初の試合は当然、私が勝った。しかしそれ以降、夫が勝ち続けた。師匠の私をやっつけるとはけしからん、と私は負けてはすぐに「もう一番」と挑戦した。何度戦っても負けた。その時である。夫が下を向いて、プーと噴き出した。

夫の笑いで、それまでこらえていたものが一挙に爆発した。「人をばかにして、悔しい」と私は言う。夫の頭をボカボカとぶってしまった。「ごめん、ごめん、愛しているよ。今度はわざと負けてあげるから」と夫は頭を押えながら言う。私は「わざと負けてあげる」という言い草にまた腹が立ち、さらにボカボカとやっってしまった。

この時の模様を夫は誇張に誇張を重ねて書いた。雄たけびをあげながら腕をふりまわしたとか、馬乗りになって耳を押しつぶしたなどと書いた。あげくの果てに、「『耳の軟骨でよかつた。もう一箇所大事な軟骨があるから、よくよく注意するように』と友人に忠告された」などと勝手なことを書きつらねた。

このエッセイを読んだ義父は面くらったらしい。夫を母屋に呼びつけると、「正彦、こんなひどい書き方をしたら、美子さんが怒って里に帰ってしまうぞ。お前は何度お見合いをしてもふられてばかりいたではないか」と沈痛な面持ちで言ったという。

義父の言葉を思い起こすと胸が熱くなる。嫁いできたばかりの私を大真面目に心配してくれた義父に感謝したくなる。もう少し長く義父が生きて母屋かららみをきかせてくれれば、夫の読者に「その悪妻でございませう」と頭を下げていられたのに、と残念に思う。



かきたいけど、どうしようかな、どこで習えるの、誰か仲間に入れて。そんな時の参考に、市開催の講座や問合せ先の一部をご紹介します。

### 市の情報提供 「かく(書く・描く)」ために

#### ★ライター入門講座

文章を書くの嫌い、書くの大好き、もっと楽しく自分のために書いてみたい。そんな人たちのための文章講座。毎年1~2月ごろ開催、4回連続講座。  
(問) 市民活動センター男女共同参画担当 0422(60)1869

#### ★市民講座

市内在住・在勤・在学の18歳以上の方を対象に初心者パソコン教室を年2~3回開催しています。内容はワードを使った文書作成、電子メールの送受信などです。  
(問) 生涯学習スポーツ課 0422(60)1902

#### ★老壮セミナー (60歳以上の市民対象)

全15回連続講座の中に「絵の見方、描き方」「硬筆書道を書く楽しみ」「文章を楽しく書くコツ」などが各1回ずつ含まれたセミナーです。  
(問) 生涯学習スポーツ課 0422(60)1902

#### ★武蔵野市芸術文化協会

芸術関係の講座開催のほか、団体の育成・支援・成果発表の機会提供をしています。なかでも文化祭・自主イベント・芸文講座の中でさまざまな「書く・描く」を行っています。  
(問) 0422(60)1856 火・金の9:00~16:00受付

#### ★市民会館

公開学習から参加しているいろいろな体験、市民会館文化祭の作品展示で何か自分の好きなことが見つかるかも。絵画、絵手紙、書道の団体もあり。  
(問) 0422(51)9144

★市報「市民伝言版」の「おいでください」「仲間あつまれ」にも情報がいっぱいです。こまめにチェックして、自分のやってみたいことを見つけよう。

## Q2 どんなときに、どんなことを「かきたく」になりますか？

- ・部活の企画書や予算案の作成は楽しく、顧問の教師との交流も深まった。……………男16歳
- ・人の顔をデフォルメで描くとみんな盛り上がる。……………男19歳
- ・「自己満足」のために書くが、ほとんどの場合「自己不満足」になる。……………男57歳
- ・手紙の片隅に花などを描いて出すと、読む方も気持ちが穏やかになると思え自分もうれしい。 ……女82歳
- ・手紙を書くと相手から電話がかかってくるのでわずらわしい。……………女70代
- ・一番は「恋愛」のこと。片思いのときから結婚している今も日記に書いている。……………女35歳
- ・メールは定期的に、手紙は写真を送りたいときに、イラストや詩は本を読んだときに。……………女14歳
- ・メールは相手の都合を考えなくていい手軽な手段。……………女41歳
- ・出産を機に10年日記をつけている。毎年その日付に、過去を振り返ることができていつも新鮮。 ……女39歳
- ・メールは人間関係ではマイナス面が多い。……………女39歳
- ・自分を見つめなおしたいとき、心を落ち着かせたいとき、気持ちの整理をつけたいときに書く。 ……男28歳 他多数

## Q3 文章を書くとき、女らしい、男らしい表現はあると思いますか？

- ・存在しないと思う。……………女14歳 男16歳
- ・メールでの連絡は簡潔明瞭が鉄則。……………男47歳
- ・短歌など短い文章や恋文などで使いこなせるとステキだと思う。……………女39歳
- ・お便りに関しては男女の表現、性格、人柄などが表われると思う。 ……女40歳
- それらを考慮して思いを伝える楽しさと活字にする難しさを感じている。……………女40歳
- ・文章を書く上では目上、男女別に言葉をわきまえて、丁寧にかいているつもり。……………女82歳
- ・女性はよく「かわいい」という言葉を使うのが、男から見て特徴的。……………男70代

## Q1 あなたが今、興味を持っている「かく」表現はなんですか？



その場で届くメール、待つ間がまた楽しい手紙。分岐点は30～40代でした。でも、手紙を書く女性は年代に関係ないみたい。手書きの文字の向こう側に相手の顔が浮かぶから。投稿や掲示板への書き込みは、自分のことをわかってもらいたいから。日記帳を広げ、たった一人で自分の気持ちと向き合うのも素敵です。

まなこレポーター通信

## ネット裏の文章トレーニング

レポーター 古橋 哲 (文)



工夫するのです！ 趣味のメールなので、ダジャレを連発したり、スポーツ新聞や週刊誌の見出しよろしく淡い期待を抱かせる……こんな遊び心を取り入れて、毎日書くトレーニングをしています。

野球生観戦が大好きで、時間の都合さえつけば球場に通います。当然、メル友やネット掲示板の書き込みは「野球仲間」が大半。老若男女の垣根も利害関係も一切ないので、中・高生から親と同世代の方まで、「野球ネタ」でメールやネットで大盛り上がり。観戦予定の約束にもメールは重要です。

私はパソコンでしかメールしませんが、私なりのマル秘テクニックをご紹介します。まずは相手がパソコンタイピングで、文章の長さや書き方が全然違います。パソコンは文字数無制限一本勝負。延々と書きつらねてもOK。ただし適当に行替えしないと読みづらいので、「段落替えのトレーニング」にはもってこい！ 一方のケータイは文字数との戦い。ケータイによっては一定文字数までしか受信できなかったり、○○文字までは受信無料だったりするので、その文字数以内に収めるように努力します。こちらは「文章をスリム化するトレーニング」に最適！

また、相手がパソコンの場合に重要なのが「件名」です。パソコンはケータイと違って、一定時間後に立ち上げるとメールが何件も受信されますが、数多くの中から自分が送ったメールを真っ先に読むためにはどうするか？ 思わず開いてみたくなる「オモシロイ件名」を工夫するのです！ 趣味のメールなので、ダジャレを連発したり、スポーツ新聞や週刊誌の見出しよろしく淡い期待を抱かせる……こんな遊び心を取り入れて、毎日書くトレーニングをしています。

まなこレポーター通信

## 「明日、公園で一緒に遊ばせない？」 「O・K！」

レポーター 菊谷 美恵子 (談)



メールは友人との交流を広めたり深めたりするための便利な手段です。夫と二人での子育てに余裕を持つための便利な道具です。もちろん、一番大事なのは会って話をするのだと思います。(文 尾花雅子)

携帯電話を持ったのは、二年前。当時は四歳、二歳の息子と0歳の娘を連れての大移動。一人病気になる元気な二人も連れての病院通いでした。周りの人にも助けてもらいましたが、買い物や行楽は夫と二人で三人の子どもを連れて動きます。こんな時、別行動をとっても、リアルタイムで連絡がとれるのでとても重宝しました。

それに携帯電話にはメール機能があります。以前は電話での連絡でしたが、相手の生活時間が気になります。その点、受信したメールは都合の良い時に読めます。それに親しい仲間内では、誘いやすく断りやすいのです。話し言葉の微妙なニュアンスを感じることなく、返事だけを受け取れば良いのですから。

夫との普段の連絡もメールです。子ども達は寝る前に夫が帰ってくると喜んで興奮し遅くまで起きています。カエルコールでは子ども達にわかりませんので、「これから帰る」というカエルメールです。まだ起きている子どもがいる時は「あと一人」などと打てばゆっくり帰ってきてくれます。出来るだけ子どもの生活のリズムを守ることに協力し合っています。

メールは友人との交流を広めたり深めたりするための便利な手段です。夫と二人での子育てに余裕を持つための便利な道具です。もちろん、一番大事なのは会って話をするのだと思います。(文 尾花雅子)



# 知っていますか「ノートテイク」???



「大切なのは気持ちと技術です」と、沖本さん。

耳が聞こえない、または聞こえにくい方へのコミュニケーション支援として、手話の他に要約筆記があります。話し手の言葉、音をその場で筆記していくことです。「ノートテイク」もその一つであり、バリアフリーの時代にその必要性はますます高まっています。

ボランティアセンター武蔵野で講座が年一回開かれていると聞き、センターの沖本京子さんを訪ねました。

**「ノートテイク」とは**  
聴覚に障害のある方が普通の学校などで授業を受けるとき、隣に座って先生のお話を要約して用紙に筆記することです。二人一組で交替しながらやります。

病気などで途中から聞こえなくなったりして手話がわからない方や、難聴の方には必要な支援と言えるでしょう。また手話を理解したとしても、手話を見ている間はノートを取ることは難しいです。

対象者が大勢の場合、筆記したものをOHP（オーバーヘッドプロジェクター）という機器で拡大しスクリーンに映したり、またパソコンで打ったものを映し出すなど要約筆記にもいろいろな形があります。

### 講座があるようですが

7、8年程前「二日ボランティア学校」の一つに、要約筆記を取り上げたことが始まりです。週一回の10回シリーズとなつて、今年で3年目です。

市報や広報誌『ふれあいむさしの21』などでお知らせしますが、今年から「ノートテイク」の講座名で9月頃を予定しています。現在、センターに属しているボランティアグループに「要約筆記サークル『むさしの』」があり、受講後希望してここで勉強を続ける人もいます。

### ボランティアを依頼するには?

ボランティアセンターが窓口です。受け付けた依頼は「要約筆記サークル『むさしの』」の人達にも紹介しています。これまでいくつかの大学から依頼がありました。

大学によっては「ノートテイク」の講座があり、登録している学生の中からカバーし合うこともあるようです。また中途失聴の高齢者の方が一番困られるのは病院ですね。受付で名前を呼ばれてもわからないわけですから、たまにそういう依頼もあります。

### 活動をする上で大切なことは?

まず書くことが好きというのが大前提ですね。でもただ書けばいいものではない。正確に・速く・読みやすくするために技術が必要です。その習得のための学習や訓練は欠かせません。

### 課題は?

ボランティアの人数が足りないのが現状です。場所や金銭的な問題もあって環境づくりはまだ整っていません。

聴覚障害の方が大学に入るには、1倍の勇氣、努力、勤勉が必要とされると思います。そんな彼らを応援するためにも、一般の方にもっと「ノートテイク」の存在を広めたいですね。

取材 加藤 和子(文)  
レポーター 福井貴美子

まなこ  
昔がたり

## 「女は絵なんか描いたら……」

関前 島津好江 70歳

「私が小学生の頃は、玉川上水の土手から五日市街道まで、一面が麦畑。のどかな景色の中、B29の空襲を高射砲が迎え撃つ。息を殺して下校しました」と話す島津好江さんは昭和8年、関前の生まれ。生家は農業、戦前は近隣で養蚕もさかんで、衣食もできる限り自給自足だった。

だが「子どもを区別せず育てる母の方針で」日曜に雇い人も含め20人分の朝食を早起きして作るの、島津さんの役。畑仕事は母や若い衆、子ども達が総出で働いた。

終戦を迎え、武蔵野女子学院に学んだ中学時代は油絵に夢中になる。貴重な画材を恩師から譲り受け、家業と勉強の合間をみて描く。都美術館の女流展などに出品されるほどだったが、ある日帰宅すると、画材も作品も全部消えていた。「祖父が燃やしてしまったんです。女は絵なんか描いたら与太者になる、うまいご飯を作るのが先決だ、と」

結婚後は親族の世話や育児に追われ、絵から遠のく時期もあったが、31年来続く手芸の会が今、生活を彩る。仲間と「いつも助け合おうね」と話すだけで心強い。様々な体験を経た島津さんの原点は、ずっと武蔵野にあった。（\*現在の教育委員に準ずる）

当時、自宅に住み込む女中さん達は同じ小学生。『おしん』同様、数年分の給金前払いで東北からモンペ姿でやって来る。

価値観が一変した戦後だが、学務委員(\*)だった祖父でさえ「女子教育は花嫁修行の一部」と考えていた。



しかし父母の理解で、祖父亡きあと再び絵筆をとり、山歩きも楽しんだ。山小屋に父が送つ

取材 藤井 美里(文)  
レポーター 高野良美



創作人形の衣類はすべて昔の着物類から。

本で紹介 今回のテーマ「かく」に関する本を、ネットワークセンターの蔵書の中から。貸出しもOK。



武蔵野市境2-10-27 武蔵野市政センター2階  
TEL・FAX 0422(37)3410  
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp  
URL http://www.clipcraft.or.jp/m\_hnc

### 「密着母娘」 誤った母と正しい母の娘



門野 晴子・門野 智子 著  
(講談社)

PTAに殴り込みをかけた「過激な母」とその懐からエイッ!とアメリカまで飛び立った「ユニークな娘」の往復書簡。話題は「かわいい孫=息子」「自分たちの親子関係」「母とその母との関係」を軸に、子育て・女の性と生・社会批判と、さすが「愛するものために」「老親をすてられますか」の著者は相変わらず全力投球。その母をやんわり受け止めスルリと交わす娘とのズレが面白い。

### 会報「あんふあんで」



あんふあんでの会

新聞紙上での「子持ち女集まれ!」の呼びかけにこたえて集い、自主保育やテーマ別イベントなど自主活動を続ける「あんふあんでの会」。「産む」「考え出す」「創り出す」というフランス語の意味そのままに、投稿の内容は子育ての枠を越えて多岐にわたり、投稿者の年齢層も幅広く、「女たちにとっての今」が読みとれ、パワーを感じます。

### 「わいふ」300号



グループワイフ

読んでも書いても自分が見つかる投稿誌「わいふ」。30年も前に団地の主婦たちが創刊したミニコミ誌が、今では会員が全国で5,000名に。再登場ですが、この300号は活気に満ちています。一回の欠号もなく出し続け、質の高い投稿は読み応え充分。読み出すと時間を忘れるほど。本音で書く重みがいっぱいと感じられます。



### レポーター体験記

「学生さんが『単位とれました』と喜んでくれるのが自分のことのようにうれしくて」と話すボランティアさんの笑顔がすてき!私も聞こえにくくなった高齢者の通院時に付き添って、医師の話をメモで伝えるボランティアからお手伝いできるとうれいと思います。(福井貴美子)

### ●要約筆記サークル『むさしの』の勉強会におじゃましました

毎月第1~3金曜日の10時から12時まで、ボランティアセンターで勉強会が行なわれています。活動を通しての感想は? 「漢字や専門用語にとまどうことがある」「同時通訳に通じる面もあり、訓練は必要」「相手の方の喜ぶ顔を見るのはうれしい」など。その一方、人数がそろわなくて、人のやりくりが大変。「だからセンターの講習会に多くの人に参加して、興味を持ってもらいたいし、私達も講演会などがあれば協力したい」



レベルアップを目指しがんばっている皆さん。

お問合せは

武蔵野市民社会福祉協議会ボランティアセンター武蔵野  
〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町4-10-10  
TEL 0422(23)1170 FAX 0422(23)1180

●市川順子 (39歳)

毎晩8時まで続く選挙運動の騒音、大迷惑!! 幼な子の睡眠と夜の静かなひとときを壊す活動時間を見直してほしい。『まなこ』の活動に私達の声を反映していきたい。



レポーター会議風景  
4月24日(木) 10:00~12:00 市役所第805会議室

●和田あやこ (27歳)

めざせ!! 脱専業主婦。『まなこ』レポーターは、私の社会参加への第一歩。社会に向けて、めいっばい目を開き、武蔵野の町や人やその生き方をレポートしたい。

●山田マリ子 (60代)

武蔵野に戻って十数年、今年の春はじめて『まなこ』を手に入れました。変わっていかざるを得ない21世紀の姿を少しでも身近なところから伝えていきたいと思っています。

●松田理恵 (30代)

3歳で武蔵野市へ越して以来、三十年、父や夫の転勤で離れた時期もありますが、ここは私の拠点です。誌上でもみなさんにお会いできるのを、楽しみにしています。

●古橋 哲 (42歳)

「遊び心」や「ムダ心」を大切にしている人って、すばらしいと思いませんか?一度きりの人生です。だからこそ、「ゆとり」のある人間に、私はなりたい。

●福井貴美子 (41歳)

焦るな! めげるな! 頑張りすぎるな! 肩の力をぬいて笑顔でいこうよ! 大切なのは諦めないこと! 自分にもまわりにもエールをおくり続けたいお気楽主婦です。



●菊谷美恵子 (31歳)

3人のママとして突っ走ってきました。子育ては次世代を育てる壮大なプロジェクトだと考えてみても実際は、孤独。子育て中の方と『まなこ』で共感できたら素敵です。

●高野良美 (40歳)

男女にまつわる「らしさ」の観念を支えているのは、実は私達の何げない日常だったりします。『まなこ』に関わることで、そういったものを見つめ直せたらと思います。

●塩田直子 (34歳)

一児の母です。男も女も一社会人として活躍しつつ、ゆっくり子育てできる社会に思いを巡らすも、現実はまだ遠い。まずは自ら考え動いてみようと思います。

●曾我部一美 (32歳)

子供のころ、学生時代、独身のとき、それぞれのときに感じたことを忘れずに、子育て中の今の立場でこそ感じることを伝えていきたいと思っています。

\* 市民活動センター 男女共同参画担当では \*

- 6月3日(火) 武蔵野市女性関係行政推進会議が市長を議長に開催され、第二次行動計画の最終年事業が報告されました。
- 15年度男女共同参画施策推進費は、男女共同参画推進市民会議費1,524千円、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの管理運営費5,671千円、男女共同参画施策事業費8,861千円です。
- 国の男女共同参画会議基本問題専門調査課員で検討を進めた「女性のチャレンジ支援策について～女性のチャレンジは、男性の元気、社会の活気～」の最終報告がありました。内閣府において実効性のある総合的な措置の具体化についての調査・研究の

うえ、さまざまなチャレンジ支援策がこれから行われていきます。また厚生労働省では、仕事と家庭を両立しやすい雇用環境の自主的な整備をさらに進める「両立指標に関する指針」の策定がありました。東京都では、企業が多様な価値観をもった男女の能力発揮をできるように「ポジティブ・アクション実践プログラム」が作成されました。国や都の動きについてもこのコーナーで紹介していきます。

企画政策室市民活動センター男女共同参画担当

TEL 0422 (60) 1869 URL <http://www.city.musashino.tokyo.jp/>

STAFF

レポーター	市川順子・勝野智子 加藤祐子・菊谷美恵子 高野良美・塩田直子 曾我部一美・福井貴美子 古橋 哲・松田理恵 山田マリ子・和田あやこ
取材・編集	森 治美 (編集長) 尾花雅子・加藤和子 藤井美里・星 詩子
☆ 他にもたくさんのアンケート協力員、編集協力員に支えていただいています。	
デザイン	小井戸厚子
イラスト	本田 倫
印刷	横河グラフィックアーツ株式会社

★表紙のイラストは、共働き夫婦の日常生活の「ひとこま」を切り取って、描いていきたいと思っています。(本田 倫)

★そろそろ、夏休みの始まる季節。子どもの頃に帰って、絵日記に挑戦してみましようか。次号のテーマは、「そだてる」です。(森 治美)

★アルゼンチンに行った友人にメールを送ったら翌日返事が返ってきた。今から8年前のこと、そのときの驚きと感動、メールが当たり前になった今、わかるかな。(星 詩子)

★中学時代、交換日記ならぬ交換創作物語をしていた。友人が好き放題にストーリー展開するおかげで、辻つま合わせに一苦労。って、むこうも同じ気持ちかな。地道に続けていれば今頃...? (藤井美里)

★今までいろいろな「かく」ことに興味を持ってきたけれど、どれも長続きしなかった気がする。とりわけ日記と家計簿は...でも手書きのお便りをいただくうれしさだけは変わらない。(加藤和子)

★手紙は下書きをしてから書く。パソコンのキーを打つ時も必ず下書きをする。四本の指でたたく音はまるで雨だれ。文明の利器を使いこなせるようになるのはいつのことやら。(尾花雅子)

編集後記